

平成 16 年度地球温暖化防止活動推進員等

研修事業(兵庫県)委託業務

報告書(概要版)

平成 17 年 3 月

財団法人 ひょうご環境創造協会

(兵庫県地球温暖化防止活動推進センター)

はじめに

兵庫県では平成 12 年 8 月より、兵庫県地球温暖化防止活動推進員が委嘱され、現在は第 3 期となる兵庫県地球温暖化防止活動推進員 339 名(平成 16 年 4 月に委嘱)により、地域に根ざした地球温暖化防止活動の普及啓発活動を推進しております。

また、兵庫県独自の制度として、兵庫県地球温暖化防止活動推進協力員が 100 名委嘱されており、推進員の活動に対する協力ならびに連携により、具体的かつ効果的な地球温暖化防止活動の推進を図っております。

さらに推進員、協力員により、兵庫県内の 10 地域において「地球温暖化防止活動地域連絡会」を組織し、活動促進や情報交換に取り組んでいます。

今年度、財団法人日本環境協会(全国地球温暖化防止活動推進センター)の委託を受けて、兵庫県地球温暖化防止活動推進員・協力員の知識、技術の習得ならびに情報交換等を図るため、県内各地域においてそれぞれ個別のテーマを設定した研修会を日帰りまたは 1 泊 2 日の宿泊により実施しました。

この研修会が、各推進員のスキルアップに資するとともに、各地域におけるより一層の地球温暖化防止活動の推進につながり、ひいては広く県民に地球温暖化防止対策が浸透していくことを期待しております。

平成 17 年 3 月

兵庫県地球温暖化防止活動推進センター

目 次

平成 16 年度地球温暖化防止活動推進員等研修事業(兵庫県)について

1 . 研修の目的	1
2 . 研修の実施者	1
3 . 研修の概要	
(1) 研修のねらい	1
(2) 研修プログラムの企画	2
(3) 研修スケジュール及び内容	
第 1 回研修会	2
第 2 回研修会	7
第 3 回研修会	13
第 4 回研修会	19
第 5 回研修会	25
4 . 総括	36

平成 16 年度地球温暖化防止活動推進員等研修事業(兵庫県)について

1. 研修の目的

我が国は平成 14 年 6 月に、「京都議定書」に批准し、国内における温室効果ガスの排出量を 1990 年度(平成 2 年度)に対して 6%削減を約束している。

日本の二酸化炭素排出量の中で産業部門からの排出は依然として大きな割合を占めているが、事業者による自助努力の成果などにより 1990 年と比較してもほぼ横ばいで推移している。しかしながら民生部門、運輸部門ならびに業務部門(卸小売、事務所・ビル等)における排出量は右肩上がりの増加傾向にあり、兵庫県においても同様の傾向となっている。

二酸化炭素の排出を抑制し、地球温暖化を防止する為には、私たち国民一人ひとりが意識し、普段の生活を環境に配慮したライフスタイルに変革することが不可欠であり、このことを普及啓発するために、地球温暖化防止活動推進員の役割が重要である。

「地球温暖化対策の推進に関する法律」でも謳われているように、地球温暖化防止活動推進員は、自らの日常生活で地球温暖化防止対策を実践すると共に、他の推進員等と連携しながら普及啓発に努めることが求められている。

このため、兵庫県地球温暖化防止活動推進センター(以下、「兵庫県センター」という)では、兵庫県地球温暖化防止活動推進員(以下、「推進員」という)および兵庫県地球温暖化防止活動推進協力員(以下、「協力員」という)に対して、地球温暖化問題についての基礎的かつ最新の情報の習得ならびに資質向上のための研修を実施するとともに、普及啓発活動に寄与する物品を整備することとした。

「兵庫県地球温暖化防止活動推進協力員」は、兵庫県地球温暖化防止活動推進員の活動に協力するとともに、自らも地球温暖化防止対策に取り組み、地域での普及啓発に努めるべく、兵庫県が独自に設置した制度です。推進員と同様、兵庫県知事より委嘱を受けています。

2. 研修の実施者

当業務は、財団法人ひょうご環境創造協会(兵庫県地球温暖化防止活動推進センター)が財団法人日本環境協会(全国地球温暖化防止活動推進センター)より委託を受けて実施した。

3. 研修の概要

(1) 研修のねらい

県内各地域において、それぞれテーマを個別に設定するにより研修を行った。地球温暖化問題についての基礎知識および最新情報の習得、各自の有する知識、情報を他者に伝えるための技術、様々な立場の人々と議論を進める際に必要となる技能についての研修を行うと共に、グループワーク等により、地域における各推進員、協力員の実践的取り組み情報等を交換し、推進員全体のスキルアップを図った。

(2) 研修プログラムの企画

研修会企画にあたっては、企画検討会(委員長1名を含む委員7名;委員名簿はp-12)を設置し、研修スケジュール案、カリキュラム案の検討、テキスト執筆者、研修講師選定に関する助言、協議を行った。

第1回企画検討会

[日時] 平成16年9月18日(土) 10:00~12:00

[場所] 県立神戸生活創造センター 7階会議室

[内容]・委員の構成と委員長の選出について

- ・ 検討会の進め方について
- ・ 昨年度の地球温暖化防止活動推進員研修会トレーニングプログラムについて
- ・ 今年度の地球温暖化防止活動推進員等研修会のスケジュール及び内容について
- ・ その他

第2回企画検討会

[日時] 平成16年12月18日(土) 10:00~12:00

[場所] ひょうごボランタリープラザ セミナー室

[内容]・研修会実施状況(第2回1泊2日型研修会、第3回日帰り型研修会の報告)

- ・ 第4回、第5回研修会の進め方についての検討
- ・ その他

第3回企画検討会

[日時] 平成17年2月26日(土) 10:00~12:00

[場所] 兵庫県中央労働センター 502会議室

[内容]・平成16年度兵庫県地球温暖化防止活動推進員等研修会についての報告

- ・ 平成17年度研修会の方針についての検討
- ・ その他

(3) 研修スケジュール及び内容

第1回研修会

【日時】 平成16年4月28日(水)14:30~16:30

【場所】 兵庫県公館 大会議室 (兵庫県神戸市中央区)

【参加者】 兵庫県地球温暖化防止活動推進員・協力員 292名

(うち、推進員237名、協力員55名)

一般100名

【概要】

- ・ 兵庫県地球温暖化防止活動推進員・委嘱状交付式
- ・ 兵庫県知事 井戸 敏三 氏 挨拶
- ・ 基調講演「地球温暖化対策に向けた自然エネルギーの役割」
講師 特定非営利活動法人 環境エネルギー政策研究所
所長 飯田 哲也 氏
- ・ 講義「地球温暖化防止活動推進員・協力員の役割と活動について」
講師 兵庫県健康生活部環境局大気課 課長 阿多 修 氏

- ・ 講義「兵庫県地球温暖化防止活動推進センターによる活動支援について」
講師 兵庫県地球温暖化防止活動推進センター 事務局長 菊井 順一

【講演内容等】

[兵庫県知事 井戸 敏三 氏 あいさつ (概要)]

- ・ 今から6年前に京都でCOP3が開催された。そこで「京都議定書」が締結された。
- ・ 京都議定書では、日本は二酸化炭素排出量を、2010年までに1990年比6%の削減することと決まっている。
- ・ 京都議定書は、締結から6年たった今も、アメリカが離脱するなどしたため、効力を持っていない。ロシアの加入により発効する事ができるので、それが待たれている。
- ・ 現実には日本での二酸化炭素排出量はすでに1990年から10%増えている。森林による吸収量を除いても、12~13%削減しなければならない。
- ・ 兵庫県でも、一つの大きな事業体ということで率先行動計画を立て、県内の各施設で省エネルギー、省資源、グリーンエネルギーの導入などにより二酸化炭素排出削減に取り組んでいる。
- ・ 推進員、協力員の皆さんは、地域に根ざして活動を広めるとともに、自らも知識を持って活動に取り組む役割にある。県と一体となって、温暖化防止活動に取り組んで頂きたい。



[環境エネルギー政策研究所 所長 飯田哲也氏]

- ・ アメリカが、ブッシュ政権になってから京都議定書の離脱を表明したが、アメリカではナショナルリサーチカウンシルという学術会議が、急激な気候変動と不可避かつ予測不可能な事象が起こるというレポートが発表された。またペンタゴン(アメリカ国防総省)でも、急激な気候変動について約11億円もかけての調査研究費を始めた。さらにアメリカの上院で、気候変動についての調査のために約70億円の予算が承認された。
- ・ 温暖化問題は100年或いは数世紀の問題だけでなく、場合によってはもっと短期間に非常に大きな問題が起きる可能性がある。
- ・ 地球温暖化や気候変動の問題は、そのままエネルギー問題とも言われるが、逆にエネルギー問題は必ずしも温暖化問題ではないという難しさを持っている。しかし方向性としては持続可能なエネルギーを目指そうという大まかな合意がある。
- ・ 持続可能なエネルギーには、四つの目標がある。一つは環境影響をできるだけ低



減する。一つは原子力。また一つは再生可能なエネルギー資源。そしてエネルギーの公平性。

環境影響の最も深刻なものが地球温暖化、気候変動である。

原子力は議論することや社会的合意をすることが非常に難しい問題である。エネルギー供給の役割を果たしているとともに、環境影響の不安もある。

再生可能な自然エネルギーへの転換については、一昔前は夢物語であったが、今日では実現可能になっている。

エネルギーの公平性については発展途上国も含めていかにクリーンかつ生活に必要なエネルギーを提供すること。

- ・日本でも自然エネルギーへの関心が高まっているが、世界的にはより大きな関心を集めている。今年6月にドイツのボンで、世界から150カ国の閣僚級の方が参加し、自然エネルギーの供給増加について話し合うことになっている。この自然エネルギーサミットの面白い所は、半分は国連の下で、半分は参加者間で意志決定をしていくというもの。通常国連主催の会議では、事前に政府間の交渉で決まっていくことが多い。

政府間の協議だけでなく、地方自治体サミットや国会議員による自然エネルギー議会などが開かれるなど、非常に興味深い会議。

- ・自然エネルギー導入の動きは10年単位で大きな波が来ており、現在は第4の波の中にある。2000年代はエネルギーセキュリティが改めて問われている時代。一つは20世紀型のエネルギーセキュリティで、これは石油をいかに確保するかというもの。これが地球温暖化の問題を起こし、あるいは資源を巡る様々な戦争や国際間の緊張を増してきた。

もう一方のエネルギーセキュリティは、自然エネルギーを進めることによるもの。量的にもエネルギーが確保でき、環境も保全できる。更に雇用が生まれ経済が発展し、地域も活性化する。結果、社会そのものが非常にソフトで豊かになる。本当の意味でのエネルギーセキュリティである。

- ・自然エネルギーの発展について、風力発電は90年代に入って飛躍的に成長を始めた。世界全体の供給量から見ると非常に微量であるが、国単位で見るとこの微量な風力発電が大きな意味を持つ。ドイツでは90年の時点でゼロだった風力発電が、今現在全体の5%を供給している。

つい先日の4月2日、ドイツは2020年には20%の電力を自然エネルギーで供給すると決定した。

さらに自然エネルギーによって2010年時点で7,000万トンのCO2を削減すると報告している。

- ・日本政府の大綱では、全ての施策に取り組んでも2010年に4%増えてしまうとなっている。量にすると5,000万トン。ドイツでは自然エネルギーによってすでに3,500万トン減らしている。



- ・ドイツの自然エネルギー業界の売り上げ、経済効果は約 80 億ユーロ(日本円で約 1 兆円)。これが 2010 年には倍増するので、二酸化炭素の削減効果も倍増し、雇用夜景在校かも倍増する。これだけの効果を生み出している。
- ・ドイツは法律により電力会社に自然エネルギーの買電を義務づけている。電力会社も損をしない仕組みになっている。
- ・スウェーデンではバイオマスに取り組んでいる。現在、スウェーデンの一次エネルギーの約 19%がバイオマスエネルギー。さらに環境税で自然エネルギーを増やしている。
- ・日本でもグリーン電力基金などが各地で取り組まれている。今のところ伸びていないが、活用する可能性は大いにある。
- ・電力自由化が進んでおり、電気売る会社を選ぶ事が出来るので、自治体でもグリーンな電気を買うための入札を行うことが考えられる。
- ・北海道や東北地方には、風力発電に適した風が吹いているが、自然エネルギーによる電力供給量の目標に達しているため、普及に急速にブレーキがかかっている。また、太陽光発電は少しコストが高い上に、2005 年度で経産省と財務省からの補助が打ち切られる可能性が出ている。これらの問題から、今のままの施策では日本の自然エネルギーは成長しない可能性が高い。現在、どの様な政策が必要かを、我々を含めて検討している。
- ・寒い地域での熱利用として、バイオマスへの転換を図っていくことが大切。
- ・省エネの制度として、これまでトップランナー方式に取り組んでいたが、消費者の判断を得にくいため、東京都が独自に、ヨーロッパの制度のように電気料金を足した表示をするようになった。京都でも同じ試みを広げており、今年は長野、札幌、高知などに広げようとしている。
- ・海外の自治体の例として、スウェーデンのヨーテボリという、人口 4~50 万人の町で、2030 年に向けて自然エネルギーによるまちづくりに取り組んでいる。アメリカのサンフランシスコでは、2000 年から 2001 年にかけて大規模な電力供給トラブルがあったため、サンフランシスコ市が自ら電力会社になるという法案をつくり、今後 10 年間に電力の 4 分の 1 を自然エネルギーに転換することとしている。また、スウェーデンのベクショーやデンマークのサムト島のように、自然エネルギー100%を目指す島など、地域レベルでのエネルギー転換への取り組みが起こっている。

これらの都市は実際にいってみると非常に美しいまちである。

- ・急激な気候変動に対して、眉を上げ悲壮な覚悟で取り組むのではなく、社会そのものを根元的に量から質の経済に変わりつつある。これによって自然と文化の多様性が享受できる、非常にスマートな社会を目指すことができる。
- ・東京大学の三田宗介という社会学者が、「本当に豊かな社会というのは自然の中の、山の中で静かに沈んでいく夕日を美しいと感じることができる社会」といっている。このようなお金には換えられない価値が、今後ますます尊重されていく。そのような本当に豊かな社会を目指して温暖化問題への取り組みを進めて頂きたい。

[兵庫県健康生活部環境局大気課 課長 阿多 修 氏]

- ・地球温暖化とは、大気中の温室効果ガスが増えることによって、通常なら大気外

に出て行くはずの熱が外に逃げずに大気内にこもってしまっていること。

- ・温室効果ガスは二酸化炭素やメタン、一酸化二窒素、ハイドロフルオロカーボンなど。中でも量的に一番多いのが二酸化炭素(CO2)。
- ・温暖化が起こると熱波の増加や豪雨の増加などの異常気象が起こるほか、生態系にも様々な影響を与える。また、氷や雪が溶け出すことにより海面が上昇し、南太平洋などにある標高の非常に低い島々や国が水没するなどの影響が考えられている。
- ・1880年ごろからの気温を見ても、確実に上昇傾向にある。また、大気中の二酸化炭素の量も、1800年頃から増加している。産業革命以前はほぼ安定して280ppmという濃度だった。
- ・100年後には1.4～5.6の気温上昇が予測されている。
- ・CO2の増加は、化石燃料の燃焼が大きな原因の一つなので、対策として不要なエネルギーを使わない、できるだけ化石燃料に頼らないエネルギーを作ることが必要。
- ・国内の温室効果ガス排出量のうち、92.6%をCO2が占めている。兵庫県の場合も全国と同様の傾向にある。現在、2010年までに6%削減するための推進計画を作り、対策に取り組んでいる。今のところまだ下がっておらず、逆に増加している。今後ますますの対策が必要。
- ・兵庫県は鉄鋼や石油産業が多いため、CO2排出量のうち産業部門が占める割合が大きい。
- ・今年から推進計画の見直しに向けた作業を行う。
- ・推進員・協力員の活動拠点のための施設「エコハウス」を播磨科学公園都市に整備する。17年度に工事をし、18年度に開設すべく、現在準備をしている。
- ・現在県の施策の中で取り組んでいるものとして、関西エコオフィス宣言や条例による温室効果ガスの排出抑制など。また、推進員・協力員による取り組みも非常に重要。普及啓発に取り組みながら、自らも実践するということを進めて頂きたい。
- ・推進員の役割として、温暖化対策の重要性を住民に伝える、自ら調査を行ったりその結果を基に資料作成や助言を行う、国、県の事業に協力して頂くなどを中心として活動していただきたい。
- ・温暖化防止活動推進センターから情報を得たり、研修に参加するなどして情報収集に努め、自分たちが得た情報を住民の方々へ伝えていく、或いはセンターに伝えていくことも活動内容の一つ。
- ・皆さんの活動により、一人ひとりが温室効果ガス削減に取り組むということを県内全域に広めるため、2年の任期の中で様々な活動をして頂きたい。温暖化防止活動推進センターや我々大気課、各地域の県民局環境課に色々相談して頂いても結構です。我々もできる範囲で一緒に考えていきたい。

[兵庫県地球温暖化防止活動推進センター 事務局長 菊井 順一]

- ・本日、「活動の手引き」をお配りしたが、皆さんの活動の参考にして頂き、困ったことなどがあればまずこれを開くなど、活用して頂きたい。
- ・センターは地球温暖化防止対策推進法に基づいて都道府県知事より指定されている。役割として、啓発広報活動や活動支援、照会相談活動、調査研究活動や情報

提供活動の 5 つに区分されるが、一番大きな役割が、推進員・協力員の方々への活動支援であると考えている。

- ・センターは 2000 年 4 月 1 日に誕生し、今年 5 年目を迎えた。全国で 2 番目に指定を受けた。
- ・神戸駅前の神戸クリスタルタワー 5 階にひょうごエコプラザがある。そこをセンターの活動拠点としている。ぜひ活用して頂きたい。
- ・推進員は自ら実践することと、地域で活動していくのが大きな役割。センターと連携し合いながら活動を進めて頂きたい。
- ・支援の内容として大きく 4 つ挙げている。情報提供、研修機会の提供、啓発パンフレット等の提供、環境学習用機材の貸し出し。

情報提供については、ホームページを開設し、推進員・協力員の皆さんの活動事例などの情報発信を行っている。

研修については、昨年度末に 2 泊 3 日の研修会を開催し、講義とパネルディスカッション、グループ討議と発表会を行った。今年も数回の研修会を計画しているので、是非参加して頂きたい。

啓発パンフレットについては冊子や CD-ROM など様々な種類を作成している。特に今回配布しているエコチェックノートなども地域で活動するときにご利用して頂きたい。

環境学習用機材については、展示用のパネルやビデオ、紙芝居などを用意している。地域でイベントや環境学習会をする際にセンターにご相談頂きたい。

- ・活動する際に課題や問題がでてくれば、まずセンターにご相談頂きたい。できる限り皆さんの活動を支援したいと考えている。

第 2 回研修会

【日 時】 平成 16 年 10 月 28 日(木)11:00~29 日(金)15:00

【場 所】 スペースアルファ神戸

【参加者】 兵庫県地球温暖化防止活動推進員・協力員 52 名

(うち、推進員 47 名、協力員 5 名)

【概 要】

- ・基調講演「地球温暖化のメカニズムと国内での温暖化対策最新情報」
講師 立命館大学教授 和田 武 氏
- ・環境学習用器材の使用方法の習得
(燃料電池キット、風力発電キット、温室ガス効果実験キット)
- ・グループワーク「地球温暖化についての基礎情報を伝えるプログラムを作る」
- ・意見交換 (地球温暖化防止活動を推進する上での質疑や意見を語る)
- ・ふりかえり・わかちあい (今回の研修で学んだ内容、気づいた内容等をふりかえり、皆で共有する)

【講演内容等】

[基調講演；立命館大学教授 和田 武 氏]

地球温暖化の動向

- ・ CO₂ の増加量は、過去 1000 年でみても異常（過去 100 年で 70ppm 上昇）
- ・ 過去 100 年で気温は約 0.6 上昇し、異常気象等の環境変化が起きている。

地球温暖化のメカニズム

- ・ 温室効果ガスの大気中濃度が増加するため、温暖化が起きている。

21 世紀の地球温暖化予測と破滅的破壊防止の条件

- ・ IPCC 第三次報告書による気象情報の予測とそのリスクの説明。
- ・ 不可逆的環境破壊を回避するためには、21 世紀の気温上昇を 1 台に抑える必要がある。そのためには大気中の CO₂ 濃度を 450ppm 程度に安定させなければならず、21 世紀中に世界の CO₂ 排出量を現在の 60% 以上削減しなければならない。

国内の温暖化対策～諸外国との比較を交えて～

- ・ 欧米は原発を削減しながらも CO₂ 削減に取り組んでいるが、日本は CO₂ 削減を理由にして原発を増やしている。

新しいエネルギー見通し

- ・ RPS 法によって再生可能エネルギーの普及が抑制されるおそれがある。

進む地域の取り組み

- ・ ドイツの市民発電所は、出資者が儲かる仕組みになっている。
- ・ 日本でも市民共同発電所が様々な場所で設置されており、まちづくりなどにつながっている。



[(NPO 法人)CASA 早川氏情報提供]

- ・ 昨日(10/27)、ロシアの京都議定書への批准が議会で可決された。これによって、京都議定書発行の必要条件である 55 カ国以上、総排出量の 55% 以上となる国々の参加という条件が満たされた。COP3 で京都議定書の合意がなされてから 7 年かかったことになる。
- ・ 各国が個別に二酸化炭素削減に取り組むのではなく、歩調を合わせて全体として取り組まないと、目標を達成することはできない。特にアメリカや日本などの工業先進国が 80～90%削減しなければならない。
- ・ 22 世紀には、化石燃料を使わない世界を作らなければならない。
- ・ 国が策定している削減計画を全て実行しても、1990 年比で 6%削減を達成することはできない。だからこそ推進員の皆さんの活躍が重要になる。
- ・ 京都議定書は 2012 年までしか目標を決めておらず、それ以降何をするかを全く決めていない。京都議定書を基本にして、より高い目標を達成する必要があると考えている。残念なことに日本、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどが非常に消極的。



- ・市民一人ひとりの関心と行動で、今後の状況が大きく変わると考える。私たちが関心を持ってきちんと意見を出して全体を動かさなければならない。一緒に活動して行きましょう。

[西野田電気(株)森本氏講義]

燃料電池キットの仕組みと使い方について、資料と実物を基に説明



[グループワーク]

「プログラム企画シート」や、今回学んだこと等を基に、各グループで「地球温暖化についての基礎情報を伝えるプログラムを作る」を目的としたグループワークを行った。

《作成したプログラムのテーマ》

Aグループ テーマ「ぼくたち、わたしたちにもできるヨ 地球にやさしいこと」

Bグループ テーマ「子供のころから環境教育を生命の尊さを知る心、
物を大切にする心を育む」

Cグループ テーマ「次世代に豊かな地球環境を伝えるために」

Dグループ テーマ「環境コミュニケーションの推進」

Eグループ テーマ「地球からのメッセージ(地球温暖化防止活動の環境教育)」

Fグループ テーマ「みて、触れて、わかる環境教室」

Gグループ テーマ「地球を救う身近な環境づくり
～はじめよう省エネ・リサイクル～」

Hグループ テーマ「いかにして身近な環境問題を広く知らせるか！」

グループワークの様子



グループワーク発表



[意見交換]

質問その1：

ここの研修施設(スペースアルファ神戸)が環境保全活動に取り組んでいることは良く理解できたが、トイレにはエアタオルが設置されている。これは電力を消費するである。一人ひとりがハンカチを持ち歩くという習慣を持っていれば、この様な設備は必要なくなるのではないかな？

質問への回答(スペースアルファ神戸所長 切山氏) :

以前はペーパータオルを置いていたが、廃棄物削減の観点からエアタオルを設置することとした。宿泊施設なので顧客サービスも重要。何も置かないという訳にはいかない。また、ハンカチを持ち歩く習慣のない、海外からの利用者も多く、衛生上の面からもエアタオルの設置は必要と判断している。なお、このエアタオルは環境配慮型製品で、省エネルギータイプのものを導入している。

意見その2 :

研修施設が個室というのはありがたいが、部屋の壁まで真っ白というのは疲れがとれない。落ち着く色にできないか？

意見その2への回答(スペースアルファ神戸所長 切山氏) :

この研修施設ができた14年前は、白い壁は主流であった。また、企業の研修施設のため、通常のオフィスと同じイメージと言うことで白を基調にしている。

意見その3 :

グループワークの発表の中で、「レジ袋をなくすよう、店舗に働きかける」という意見があったが、地域や店舗の取り組みなどの仕組みや制度を作る前に、個人の意識から変えていくことが必要と考える。

意見その3 関連意見 :

個人意識の高まりを待っていては遅いので、制度を作って行動を義務づけることが必要だと思う。

意見その3 関連意見 :

制度が先か行動が先か...となると、鶏と卵の関係のように堂々巡りになるだけ。どちらも進めていくことが必要。

意見その3 関連意見 :

地域の清掃活動などをする時に、主催者が大きなゴミ袋を子供達に配布しているが、子供達が家からレジ袋などを持ってくることでも、啓発になるのではないか。

情報提供 :

淡路島で海岸漂着ゴミの清掃ボランティアをしている。中には都会から流れてきた生活ゴミなどが多く見られる。ゴミの種類や、どこから来たゴミかを考えるだけでも生活を見直すきっかけになる。

質問その2 :

自動車の利用を控えようという動きがあるが、それを実現するためには代替措置としてコミュニティバスを充実させるなど、公共交通機関の整備が必要と考える。どうすれば良いか提案いただきたい。

質問その2への提案 :

ドイツの低床型の路面電車のようなものを導入してもらうように、役場に申し入れてはどうか？



[ふりかえり・わかちあい]

本研修にて学んだことをふりかえり、学びや気づきを深めることを目的として実施。

「ふりかえりシート」に記入し、参加者同士でわかちあいを行うことで、他の参加者の学びや気づきを共有した。

発表された主な「ふりかえり」内容

- ・プログラムを作るだけでなく、参加者をどう集めるかといったことも知りたい。
- ・国や県、市町等への政策提言について、ひょうご環境創造協会の助成制度などを活用して取り組んでみたい。
- ・発表や発言では時間を守る。
- ・プログラム企画シートがはじめから用意されていたので、皆のグループワークの結果があまり差異のないものになったように思える。
- ・もっと熱くなる意見交換をした方が、本音が聞けるのではないかと。
- ・グループワーク発表や意見交換でも出たように、買い物袋を持参するなど、身近に出来る簡単なことを、まずは我々から取り組んでいきたい。



参加者アンケート結果(主なもの)

和田教授講演について

- ・初日・二日目の二回に分けもう少し時間をかけてほしかった。
- ・内容的には少し難しい感じがしたが、理解はますます出来たように思う。今後の活動に少しでもプラスになるよう努力したいと思います。
- ・具体的で新しい情報をまじえて意義のある講義で、学習させていただきました。
- ・今後 10 年、30 年、もっと先の 100 年先になるであろう状況を見せつけられると、現代人はもっと真剣に取り組まなければいけない。政治家を初め、国民にこの事を認知させていく必要があると思った。
- ・再確認と最新情報が分かり、今後の活動に生かせそうです。

環境学習用器材の使用方法について

- ・環境学習キットとしては適切なものだと思います。このキットを使って、どのように学習を楽しく面白く有意義なものにするか、これからの課題だと考える。
- ・燃料電池は新エネルギーと言われていますが、今回初めて実験でその仕組みがよく理解出来、実用化されるとすばらしいと思いました。

- ・理論的には理解していましたが、実際キットを使って実験をすることで可能性を実感できた。
- ・温室ガス効果実験キットは、改良の余地がある。

グループワークについて

- ・グループでの作業を通して大きな知識を得た。
- ・情報交換ができた。
- ・各地域の推進員と膝を交えて、本音の意見を交換でき、とても参考になった。
- ・広い範囲からの問題を一つにまとめるのに苦労したが、話し合っていく内にまとまったので感心した。
- ・発表する為に1つにまとめるということには、団結できた。
- ・多様な考え方があり、勉強になった。
- ・8グループの発表は見事に違ったストーリーであり、様々な考え方がある事(テクニック)を発見。

意見交換について

- ・他人の考え方、自分にはない体験等を得るのに良いチャンス
- ・それぞれが好き勝手に意見を言っているように思えた。活動につなげられるまで結論を導こうとしていないと思った。

ふりかえり、わかちあいについて

- ・それぞれのメンバーの感じられたことが参考になりました。
- ・今後の活動で「ふりかえり・わかちあい」を実施していきたい。
- ・ふりかえりシートで『実感』を話すことが出来た。

その他(全体を通して)

- ・参加者間の交流と活発な討議が出来たことは有意義であった。
- ・各グループの方々がイキイキとしており、参加の手引き「心がまえ」が有効であったと思いました。
- ・みんなの意見が出てよかった。
- ・意見を言う人がほぼ決まっている。



第3回研修会

【日時】 平成16年11月29日(月) 13:30~16:30

【場所】 宝塚市立男女共同参画センター 会議室

【講師】 ライフデザイン研究所 FLAP 代表 岩木 啓子氏

【出席者】 27名

兵庫県地球温暖化防止活動推進員・協力員 20名

(うち、推進員18名、協力員2名)

その他 ... 7名 (こどもエコクラブサポーター、市職員、NPO所属者等)

【内容】

- ・環境問題の深刻化
 - ・協働参画社会(「市民力」の育成)
 - ・教育改革(「生きる力」の育成)
- 環境教育の必要性

ねらい

【学ぶ】【つながる】【やる気になる】

おすすめ方

【参加体験型体験学習】

なぜ...知識を伝える場ではない。参加者はそれぞれ個性が違う。考えながら学ぶことが必要。各自が「環境教育」について考える場とする。参加者が中心。



スケジュール

【セッション】 かかわりの場を体験する；アイスブレイキング「デートゲーム」

【セッション】 これからの環境教育像を描く；

「即答フリップ式全員参加型ディスカッション」

【セッション】 おはなし『環境教育の学びの場をどうつくるか』

心がまえ

【主体的であること】

教えられる 学ぶ 暗記する 考える 知識の蓄積 意識の変化

【遊び心を忘れないこと】 固定観念にとらわれない。

【お互いに学び合うこと】 正解は1つではない。皆の発言の中から学び合う。

[【セッション】 かかわりの場を体験する；アイスブレイキング「デートゲーム」]

アイスブレイキングとは...初対面同士、心にはった氷を溶かし、温かい雰囲気にするために行う。

「デートゲーム」

参加者同士でペアを作る。

A4用紙(白紙)を4分割し、以下のテーマについて書く。

1. 今のご気分は？
2. どうしてこの講座に来ましたか？
3. 環境学習にかかわってどんな活動をしていますか？
4. 環境にかかわることで、最も関心があるのは？

文章を書く必要はない。提出の必要もないので、自分に分かる言葉で書けばよい。

インタビュー形式で進める。(聞く役と話す役を交代して)

(注意)時間は3分ずつ。後でパートナーの事を、他の参加者に紹介できるように。
メモを取るのOKだが、相手の顔もちゃんと見て話す。
いきなり始めず、あいさつ、握手、名前の紹介を行う
限られた時間で話をするトレーニングも兼ねている。

ペアでの自己紹介後

今のペアを崩さずに、新たに4人組を作る。

新しいペアに対して、自分の相棒を紹介する(他己紹介)

(注意)1人1分15秒で紹介する。(全グループまとめて時間管理をするため、話し足りなくても時間がきたらストップ。話し終わっても次の人に進まずに待つ。)
紹介されている間は、よほどの間違いでもない限り口を挟まない。



【セッション】 これからの環境教育像を描く；

「即答フリップ式全員参加型ディスカッション」

「フリップ」とは...クイズ番組などで使われる、回答記入用のボード・用紙 A4 白紙を二つ折りして使用(両面で8問に答えられる。)

マジックは先が太い方を使う(多くをかけないので、一言で書くことになる。)

即答式の利点...長考せずにはっと答える 自分の考え、本心が出る。

[ルール]グループの中で「せーの」で見せ合う。その内容を見て、自由に話し合う。

文字は記号。話さなければ内容は伝わらない。

(例題1)『私、一見 ですが、実は です』

(質問1)『環境問題の解決を阻害している要因』

会場からの意見...「意識の定着」「政策が進まない」「無限という気持ち(時間・空間的に遠い)」

(質問2)『これまでに関わった環境教育・環境学習で一番印象に残っているもの(見聞きしたものでも良い)』

会場から...「人間の立場(人が全てを支配している)」「川の旅 - 水の行き先」「自転車発電(子ども相手だと、動くものが効果的)」「エコッキング」

(質問3)『環境教育の特徴(他の教科と違うところ)』

会場から...「カタイ・とっつきにくい」「3つのステップが必要 気づく 考える 行動する」

(質問4)『現在行われている環境教育のまずい点』

会場から...「学ばせすぎ」「大変だといひすぎ」「割く時間が少ない」「危険 - 安全管理が不十分」「環境教育担当教員の養成(担当がいまい)」

(質問5)『環境学習活動を通して、一番伝えたいこと。「こんなことが分かってほしい」』

会場から...「何ごとにも規範と秩序がある」「未来のこどもにプレゼントしたい」「人としての基本」「モノを大切に」「自分の将来になる...楽しいこと」「命 - イワシが減った、ヘビが減った、カエルが奇形」

(質問6)『ディスカッションをしてみたの感想』

会場から...「1人ではできない。仲間を作って」「ねむらせてもらえない(受動的ではないため)」「自分の意見をいろいろ言うことができ、人の意見を聞くことができた」



【セッション】おはなし『環境教育の学びの場をどうつくるか』

環境問題とくらしのつながり

1. 「環境」概念をどうとらえるか

質的問題と量的問題

2. 環境問題の構造

被害者と加害者が対立する立場にあり、地域的な「産業公害型」と違い、被害者イコール加害者で、地球規模(国境も越える)で起こり、因果関係がハッキリと割り切れない問題。

3. 環境問題を解決する3つのE

Engineering(技術)...排水排気等の浄化など

Enforcement(規制)...排出基準など

Education(教育=共育)...環境に殆ど負荷をかけない、仙人のような暮らしをする人が1人いるより、少しずつでも配慮できる人がたくさんいる方が良い。

環境教育とは

1. 環境教育の特徴

現在進行形のテーマ(数学の公式、歴史、科学など)は、昔からの知識の積み重ね

問題解決学習

- ・「正解を教える」のではなく「解決策を『考える』」
- ・行動変容につながる学び

2. 環境教育で何を学ぶのか

- 知識・情報(自然界の現象など)
- 感覚・マインド(頭や心で感じる部分)
- 態度・価値

3. 環境教育の現状 (いい取り組みもたくさんあるが、今回は「まずい」と思う点)

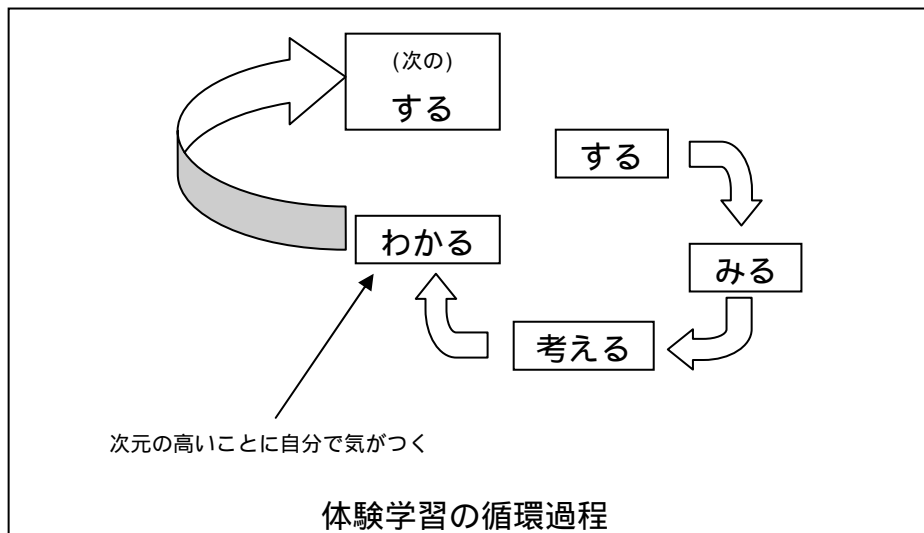
- 知識・情報偏重型(後にどうつながるか...が教えられていない)
- 行動指針提示型(理由・関連を伝えず、「 をしましょう」「 を使いましょよう」と提示 - 石けん使用運動など)
- 非日常いやし型(自然体験の場でよく見られる。日常行動を変えていくことにつながっていない。)

価値・意味とらえなおし型(体験的に学ぶことが必要)

4. 参加体験型の学び

= 価値創造型の学び(内在的価値) 価値到達型(外在的価値)

- ・推進員などが各地で講話に行くときに、少しでも具体的に参加者が納得できるような「体験型の学び」を取り入れると、効果は大きい。
- ・外に出る、物を作る...だけが「体験型」ではない。【セッション】のディスカッションのように、「参加者が何かをつかみ取った」なら、体験学習と言える。



- ・COP3 が開催される前に神戸市で開催された環境イベントに、コープこうべとして出展したイベントの例。「あなたの家に家電はどれくらいありますか？」を、来場者にアンケートを実施した。エアコン、テレビなどをリストアップしておき、何台あるかの数字を書き込んでもらう。身の回りのことをイメージしてもらうことから、主体的に参加してもらうことができる。

5. 学びのスタイルの比較

講義型(タテ型)...文法や公式などを教えるには良い。

参加体験型(ヨコ型)...どう取り組むか、どう考えるかなどを伝える。

市民講師の意味...少しだけ関心と知識があるというだけで、参加者と同じ立場で関わることができる。

環境教育に参加体験型の要素を取り入れると、非常に効果を発する。

6. メッセージを伝えるための基本要素

内容

組み立て(しっかりと練ることが必要)

つかみ(導入):自分ごととして捉えてもらう。そう思ってもらうためのつかみは非常に重要。写真・グラフ・図表などを見せるといった手法がある。

本編

まとめ

伝え方

- ・万全の準備:どんな相手かを把握する(相手によって、言葉の使い方を考える。)

持ち時間を確認する

- ・適切な身だしなみと服装:ラフすぎるのは考えものだが、スーツなどでビシッと決めていると、何でも答えられると思われてしまうことも...。市民講師なら少しはカジュアルな服装でも親しみを持たれて良い)
- ・落ち着いた態度:準備不足や経験不足をくどくど言い訳しても、参加者には関係のないこと。
- ・効果的なプレゼンテーション
 - 声の調子、間、表情、ボディランゲージが大事
 - 具体的に(抽象的な話を抽象的にされても分からない。)
 - 整理して順序よく(大きいものから小さいもの、原因から結果へなど)
 - 小道具や演出を効果的に(内容にあったもの、対象にあったものなど)
 - 受け手とのやりとりを入れよう(考えてもらえる)

[最後に「プログラム企画のポイント」]

【つながりを理解する】

【現実に向き合う】 データを提示する、まちの中を見に行く、日々の自分のくらしを見てみる。など

【自分とのかかわりとしてとらえる】



第4回研修会

【日時】 平成17年1月20日(木) 13:00~16:30

【場所】 兵庫県姫路総合庁舎 職員福利センター3階 大会議室

【参加者】 17名 (推進員15名、協力員1名、姫路市職員1名)

【講師】 (社)兵庫県子ども会連合会 浅見 真一 氏

【テーマ】 効果的なグループ活動のすすめ方を学ぶ

【内容】

・開会挨拶 兵庫県中播磨県民局 県民生活部 環境担当参事 大西 基文 氏

・オリエンテーション

ねらい ... 「気づく」(自分なりのグループ活動に気づく)

「理解する」

「その気になる」(地域に帰って、グループで、実際にとりくむ)

進め方 ... 参加者主体・参加体験型(みんなが関わるスタイル)

「トップダウン」ではなく「ボトムアップ」

「まとまる」のではなく「つながる」

単なる「ネットワーク」ではなく、共に取り組む「ワーキングネット」

お願い ... 主体的であること

遊び心を忘れないこと

互いに学び合うこと

スケジュール

・アイスブレイキング

・体験学習「グループ活動を体験してみよう」

・お話「グループ活動をうまく進めるために」

・体験学習「グループ活動のプロセスで何が起きている？」

・ふりかえり&わかちあい



[アイスブレイキング「フリップ式自己紹介」]

アイスブレイクとは？

人は新しい人と接する時、新しい場面に遭遇したときに固くなる。警戒する距離を置こうとする。

その場にふさわしい雰囲気づくり、規範作りをし、固さをほぐすのが「アイスブレイク」



フリップ式自己紹介

A4 サイズの用紙を 2 つに折る。4 面をつかって、以下の 4 つの質問に答え、グループの中で発表し合う。

- 質問 氏名、どこから来ましたか？
- 質問 いまのお気持ちは？
- 質問 なぜこの研修会に参加したか？
- 質問 効果的なグループ活動の秘訣とは？



[体験学習「グループ活動を体験してみよう」]

【その 1】

直径約 15cm の紙皿を、グループのメンバー全員が人差し指で支える(胸の高さ)。全員の人差し指が紙皿に触れている状態のまま、紙皿を床までおろす。

紙皿をおろしたいのに、なぜか紙皿が上がっていく。全員の気持ちを合わせないと紙皿がおりない。



【その 2】

5~6 名ずつのグループで手をつないで輪になる。

直径 1m くらいの輪(ロープ)に、メンバーの一人が腕を通す。

誰も手を放さずに、ロープを全員の体を通して送っていく。

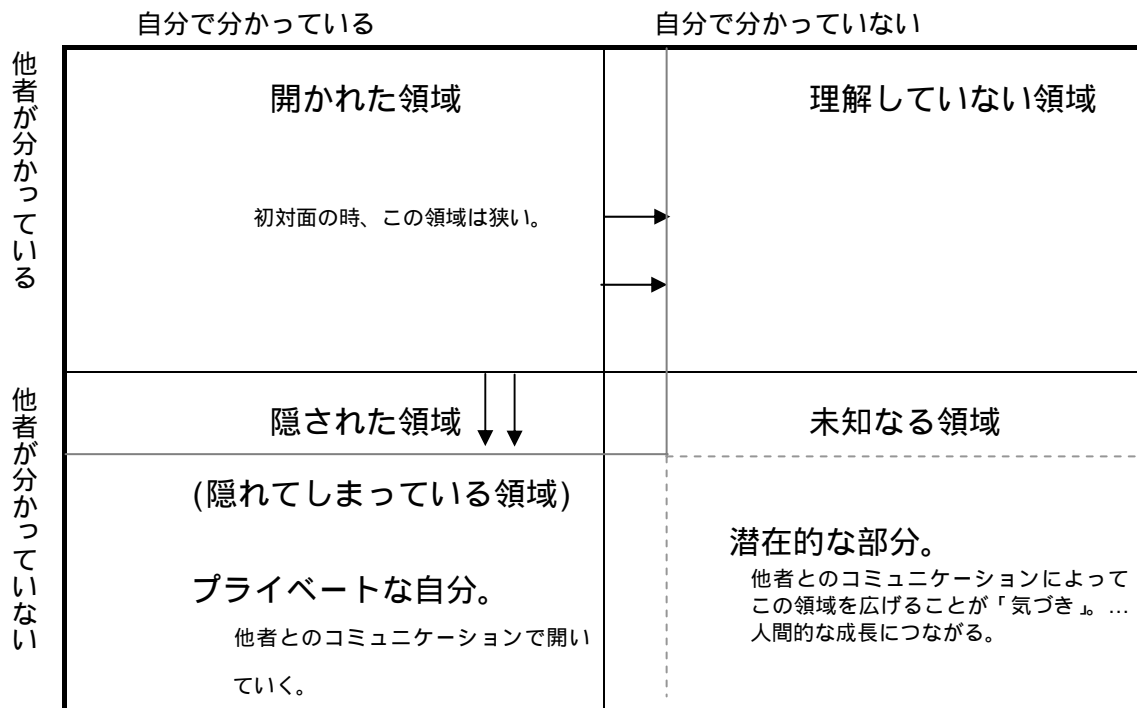
ロープが最初の位置に来たら終了。

全員でやり方を検討して、 ~ をもう一度やってみる。(1 回目よりも早く終了するように)

メンバーの協力があると、ロープを早く送ることができる。



ジョ・ハリの窓...ジョセフ・ルフトとハリー・インガムという2人の人間行動学の学者が考案した、コミュニケーションにおける自己の公開とコミュニケーションの円滑な勧め方を考えるために提案されたモデル



- ・アイスブレイクの際、同じテーマで話し合ったことで、 の領域が広がった。
- ・グループ活動には、「開かれた」コミュニケーションが必要
- ・第一印象は、約7秒でつくられる。(営業の世界では3秒と言われる)。
- ・人間性が分かるまで、100時間かかると言われる。

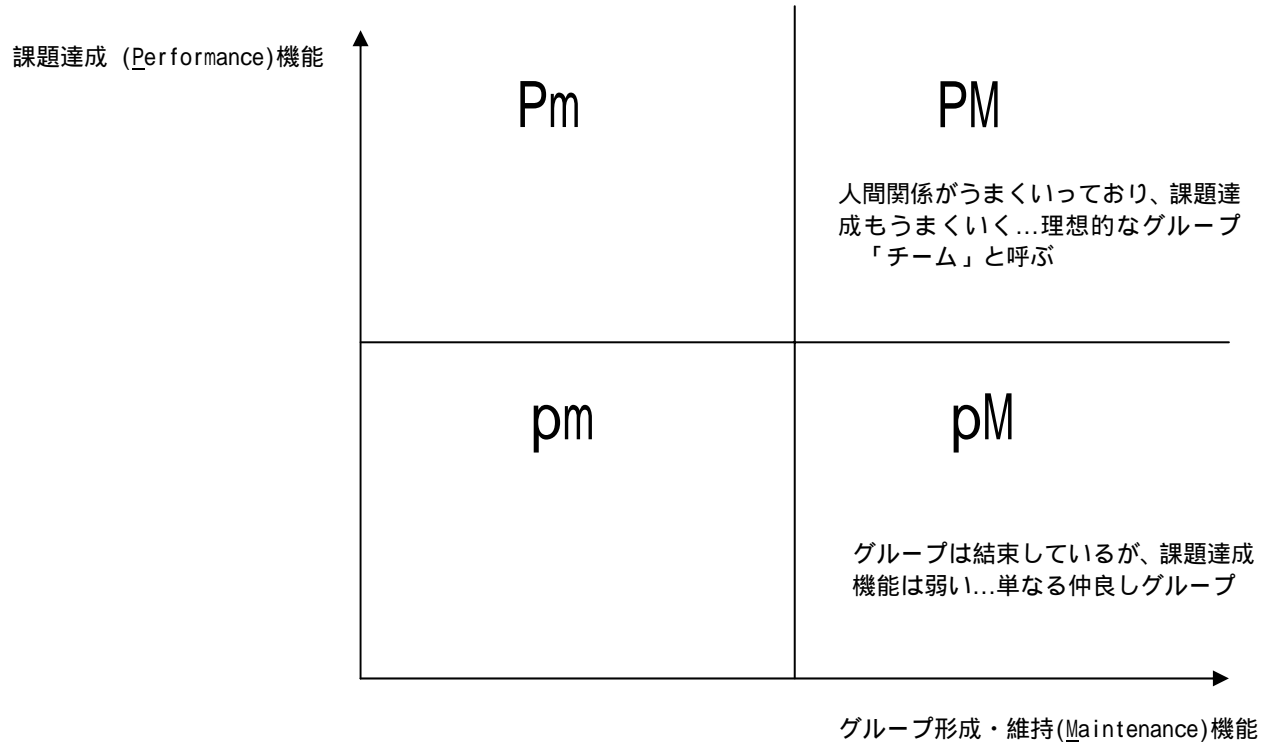


[お話「グループ活動をうまく進めるために」]

グループの2つの機能

課題達成 (Performance)機能とグループ形成・維持(Maintenance)機能

この2つがバランス良く高いグループは良いグループ(チーム)と言える。



プロセスとコンテンツ

コンテンツ...目に見える部分(グループで行うイベントなど)

プロセス...コミュニケーション、意志決定、全体の雰囲気、リーダーシップ、規範など

- ・コンテンツとプロセスの関係は「冰山」のようなもの。コンテンツは「氷山の一角」。水面下には巨大なプロセスが存在する。プロセスの重要性に気づいていないグループが多い。
- ・リーダーとリーダーシップの違い...「リーダー」は役割。「リーダーシップ」は機能。リーダーシップは誰もが持つことができる。(時間を管理する、発言を促す、雰囲気を作る、などは誰にもできるリーダーシップ)

[体験学習「グループ活動のプロセスで何が起きている？」]

各グループにバラバラになった情報カードを配布する
情報をまとめると、1枚の地図ができあがる。

情報カードは、メンバーに均等に配布するが、互いに見せ合ってはいけない。(言葉だけで伝え合う。)

制限時間は50分

最終目標は課題を達成する(地図を作る)ことだが、その過程(プロセス)で、グループに何が起きているかを観察する。



[参加者ふりかえり]

今のグループ作業の中で何が起っていましたか。気づいたことを書いてみましょう。

- ・メンバー全員が、お互いの意見(持っている情報)を共有しようと努力している様子がうかがえた。
- ・お互いに声をかけ合いながらの作業で、大変楽しかった。
- ・誰かが少しリーダーシップを取ることが必要。
- ・自分以外の人の話も聞かないと全体像がつかめない。
- ・共同作業した喜びは大きい。
- ・それぞれ自分が情報を伝え、みんなの情報も聞いて整理することは難しい。
- ・ポイントを確認しながら進め、まとめていく作業は大変。
- ・今日初めて出会った人々とは思えないほど、問題解決に一丸となって取り組めた。
- ・何か一つ目標を設定して、それに向かっていくという方法は、効果があると強く感じた。

そこでのあなたのかかわり方はどうでしたか。

- ・相手の考え方、意見を尊重しながら、自主的に関わっていった。
- ・全員が順序よく話せるようにとの心配りができなかった。
- ・ほとんどおまかせ
- ・何とか皆さんに協力をすることに心がけた。
- ・皆さんとそれぞれ言葉を交わすことができた。
- ・自分の性格がでた。
- ・情報モレがないように注意をしていた。
- ・もっと関わるべきだった。
- ・自分の意見は明解に伝えられた。
- ・場の雰囲気、意見が止まったとき、先へ進める発言ができた。

その他、気づいたこと、感じたことを自由に書いてください。

- ・第1回目にこのような研修があれば良かったのになぁと思う。
- ・このような体験は何回もすれば深まりが出来ると思います。
- ・この様にグループ活動が早く出来る要になれば、もっと効果が上がるでしょう。(講師がいない時でも)
- ・やはり打ち解けた雰囲気様が大切で、アイスブレイクはその良い薬ですね。
- ・行き詰まったときの意見調整が大切。
- ・自然と協力してこられる方が出てくるものだ。まとめようという意志が一つになった。
- ・推進員の連絡会では、年上の方ばかりなので、自分の意見が言いにくいのですが、今回のように良いリーダーシップをとってくれる方がいらっしやると、言いやすい雰囲気になると思いました。
- ・グループ運営はまずコミュニケーション作りから。目標に向かってそれぞれが主体的に取り組むことの大切さ。楽しい雰囲気作りが、運営をスムーズにする。
- ・“全体を見渡す”と言うことの大変さを感じた。時間配分、課題達成、意志疎通等の気配りなど。

[お話「グループ・プロセス観察の指針」]

グループ・プロセスの諸要素

1. メンバーシップ ... まず、自分の持っている情報を出すことで、皆の疎外感を和らげる。
2. コミュニケーション ... しゃべるだけでなく、態度など、非言語コミュニケーションが大変重要。
3. リーダーシップ
4. グループの意志決定
5. 目標
6. 時間管理
7. 組織化
8. 規範
9. 雰囲気



効果的なグループであるために

- 開かれたコミュニケーション ... 個々、グループの成長につながる
- 目的・目標の明確化 ... これがないと、「何を言えばいいかわからない」となる。

相互依存・相互責任

第5回研修会

【日 時】 平成17年2月18日(金)13:30~19日(土)15:30

【場 所】 ユニピアささやま (篠山市矢代)

【参加者】 兵庫県地球温暖化防止活動推進員・協力員 59名
(うち推進員53名、協力員6名)

【講師(講演順)】

(NPO法人)地球環境と大気汚染を考える全国市民会議 専務理事 早川 光俊 氏
環境省 総合環境政策局 環境経済課 小林 豪氏
関西電力株式会社 地球環境グループ チーフマネージャー 井上 祐一 氏
北海道地球温暖化防止活動推進センター 企画事業課長 久保田 学 氏

【概 要】

京都議定書発効を記念して、4名の講師より各20分の話題提供の後、それらをもとに質疑応答によるパネルディスカッションを実施。また、篠山地域推進員連絡会の活動発表と、篠山地域連絡会が作成した温暖化防止啓発用の紙芝居を上演した。

その後、グループワークについての基礎知識の研修を行い、グループワークを行った。

グループワークについては、参加者自身が話し合うテーマや進行方法、役割分担、発表方法等を、グループ内での合意形成により決定した。なお、パネルディスカッション講師はグループワークアドバイザーとして、グループワークに対するアドバイス等を行った

2日目は午前中にグループワーク途中経過発表を行い、アドバイザーより意見をいただいた後、グループワークのまとめ作業を行った。

グループワークのまとめ作業をグループ毎に発表した後、今回の研修内容についてふりかえりとグループ内でのわかちあい、参加者全員でのわかちあいを行った。

【内容】

[パネルディスカッション]

《参加者》 114名

[内 訳]	推進員等研修会参加者	59名(推進員53名、協力員6名)
	その他推進員	15名
	その他協力員	4名
	県職員	6名(阪神北、北播磨、西播磨、丹波の各県民局)
	市町職員	11名(尼崎市、明石市、三木市、加西市、篠山市、丹波市、 稲美町、山崎町)
	事業者	14名
	一般	4名
	学生	1名

《パネルディスカッション発表者およびテーマ》

テーマ 「京都議定書の発効と国内外の今後の動向」
(NPO法人)地球環境と大気汚染を考える全国市民会議(CASA)
専務理事 早川 光俊 氏



テーマ 「環境税について」

環境省 総合環境政策局環境経済課

小林 豪 氏

テーマ 「産業界の自主行動計画(電気事業の取組みを中心として)」

関西電力株式会社 地球環境グループ

チーフマネージャ 井上 祐一 氏

テーマ 「今後の推進員活動に期待すること」

北海道地球温暖化防止活動推進センター 企画事業課長 久保田 学 氏

コーディネーター 兵庫県地球温暖化防止活動推進センター 事務局長 菊井 順一



パネリスト発表要点

CASA 早川氏

- ・ COP3(1997年)で京都議定書が採択された後、7年が過ぎてようやく発効となった。
- ・ 気象データによると、各地ですでに気温上昇は起こっており、その影響と思われる現象も各地で見られる。
- ・ 温暖化はすでに避けられないことであるが、それによる影響を少しでも和らげるために、京都議定書への真剣な取り組みが必要である。
- ・ 京都議定書の内容についてはいくつか問題も見受けられるが、その枠組みである「達成期限」と「総量削減」と「法的拘束」は残していきたい。
- ・ 現在ある技術に加え、きちんとした政策と意志があれば6%~9%の削減ができる。日本は「今できる事」だけを積み上げているので、6%削減の達成が困難という結果になる。EUのように、温暖化による壊滅的打撃を防ぐために、CO2の排出をどの程度防ぐ必要があるかを先に考え、そのための具体的な行動を進めていくことが必要。
- ・ 我々市民としてまず取り組まなければならないことは、「省エネ」と「エネルギー転換」である。省エネについては、家庭での省エネ活動と、グリーンコンシューマーとしての行動。エネルギー転換としては市民による自然エネルギー発電への取り組みを進めること。

環境省 小林氏

- ・地球温暖化問題を解決するためには社会、経済システム自体を変える必要がある。そのために作られたのが一昨日(2005年2月16日)発効した京都議定書。
- ・京都議定書の発効を受けて、国で作っていた「地球温暖化対策推進大綱」が「京都議定書目標達成計画」に変わる。
- ・地球温暖化問題の解決に向けた手法として「自主的取り組み」や「補助金」、「国内排出量取引」、「規制的手法」、「環境税」、「京都メカニズム」が挙げられるが、これらを進める上で大切なのが「公平性」「透明性」「確実性」「効率性」の4つ。
- ・環境税とは、「美しい地球を子孫に残すための会費」であると考えてもらいたい。
- ・環境税について、環境省や自民党、公明党などで案が作られている。それぞれ細かな違いはあるが、共通するコンセプトは温室効果ガスをどのくらい減らし、社会経済システムを脱温暖化型にするかである。
- ・環境税導入のために燃料が割高となるが、その分中長期的に省エネ型製品の買い換えなどが促進される(価格効果)。また、税収を活用して温暖化対策を強力に推進することができる(財源効果)。さらに税金を導入することで広く国民の方々に認識してもらい、一人ひとりが環境対策を進めなければならないという気持ちになり、温室効果ガス削減が期待される。(アナウンスメント効果)。

関電 井上氏

- ・国内の部門別 CO2 排出量のほぼ半分が「産業」と「エネルギー転換」の部門が占めている。産業部門の CO2 排出量はほぼ横ばい。運輸、業務その他、家庭からの CO2 排出の伸びが著しい。
- ・日本経団連で策定した自主行動計画では、2010年度の CO2 排出量を 1990年度レベル以下に抑えるという目標を立て、34種57団体の事業者が参加して取り組んでいる。日本の CO2 総排出量の約 45%をカバーしている。
- ・各業界で自主的にできる目標を設定して取り組んでいるが、主要な業種の中で目標達成が一番つらいのが電力業界。
- ・電力業界の目標は、CO2 排出原単位を 90年度比 20%削減することだが、今のままでは 15%減しかできず、目標達成のためには、原子力の利用率向上、火力の利用方法への工夫、京都メカニズムによる海外での CO2 クレジットの獲得が必要になる。
- ・日本版の炭素基金は、国際協力銀行と政策投資銀行、経団連参加の各社が出資している。それを元に海外で取り組んだ CO2 削減などのプロジェクトに取り組み、そこで削減した CO2 のクレジットを日本の分とするもの。総額 150 億円もの資金が集まっているが、その 3分の1が電気事業者から出ている。
- ・関西電力は、2010年度に使用電力量あたりの CO2 排出量を 0.34kg-CO2/kWh 程度まで削減するという目標を立てている。そのために「ニュー-ERA 戦略」に取り組み、社会全体のエネルギー利用の効率化と、温暖化防止に向けた海外での取り組み、自らの温室効果ガス排出量削減を進めている。

北海道センター 久保田氏

- ・北海道の温暖化防止センターは7年前の1997年に設立された。温暖化防止センターだけではなく、環境保全活動全般の支援、環境学習活動などを使命として取り組んでいる。
- ・地域での取り組みの積み上げが京都議定書の目標達成を作り上げる。地域の生活者、事業者、市町村が主役である。
- ・法律の中ですでにいくつかの仕組みが用意されている。行政の実行計画や、温暖化防止センター、そして地球温暖化防止活動推進員や、地域協議会などがある。
- ・推進センターは全国に31あり、3,072人ももの推進員(兵庫県に324人、北海道に28人)がいるが、国内のCO₂の排出量は増加傾向にある。この理由は、「危機感がわきにくい」、「温暖化防止に地域の利益が見えない」など。また、行政・センター・推進員・市民などの相互のコミュニケーション不足なども挙げられる。これらの問題を解決することが、地域での活動推進に必要。
- ・北海道センターで2001年から2003年の間に稚内で行ってきた事例を紹介。
- ・稚内では、格安のカニツアーなどにより、地域にも負担をかける持続性のない取り組みを進めてきた。これを解消するため、「カニを食べないカニツアー」を、北海道センターと地元の酪農家が連携して企画した。
- ・内容は風力発電施設や地元の水産物の加工場などの見学、地元の方との懇談、酪農体験など。カニ観光に対して、地域の持続性を考えるための新しい観光により、持続可能な暮らしについて考えるきっかけや、「地域を見せるエコツアー」となるよう企画した。
- ・この事業によって、地元とのパートナーシップのノウハウを獲得し、東京や大阪などの遠方とのネットワークが作られた。しかし、事業実施に手間がかかることから継続せず、また地元への大きな普及には至らなかった。
- ・「推進員として何をすべきか」ではなく、「推進員であることを活かして自分に何ができるか」ということを考えることが必要。また、個人で活動するだけでなく、他の人や団体と組むことが非常に大切。水産や観光や環境などをつなぎ、その中に温暖化防止を織り込むなど、地域に対して仕掛けていくというやり方もある。最後に、我々自身が楽しそうに取り組むことが必要。

質疑応答概要

パネリストからの発表の後、来場者から質問票を回収して取りまとめ、コーディネーターによる進行により、パネリストから回答をいただいた。

質問票：京都議定書では日本のCO₂削減量は1990年比6%だが、2003年には8%増加している。計14%削減できる見通しはあるのか。また、早川氏の発表で、CASAの試算では9%の削減と代替フロンで2%削減が可能とあったが、その内訳を説明してもらいたい。

早川氏：CASAでは6%削減の達成は可能と考えている。今の政府の推進大綱の政策ではできないので、追加対策を検討している。我々は鉄鋼、電力など部門ごとに、今できることを細かな項目で整理した。これを導入すれば削減目標以上の達成が可能。原子力については賛否両論あるが、我々は30年以上の原発を随時廃止していくこ

とし、その間に再生可能エネルギーで供給できる道を探っていくことを提案している。その他、公共事業の半減などで消費の削減を図れば、吸収源を含めなくても9%削減できると考えている。要はやる気の問題。

会場からの意見：行政はやる、やると言うばかりで具体的に何をするかを言っていない。

早川氏：CASAでは、部門毎に実現できる取り組みを具体的に整理して提案している。例えば家庭でできることは住宅の断熱や省エネ行動など。それを実際にするかしないかは各主体である。

菊井：行政が作る計画には、実際に誰がどのようにするのかを書いていないことが多い。これは大きな反省材料として指摘を受けることがある。

質問票：環境税について「アナウンスメント効果」などにより二酸化炭素排出削減効果が言われていたが、実際に効果があるのか知りたい。日本以外で環境税を導入されている国の事例と合わせてお答え頂きたい。

小林氏：効果についての疑問はよく聞くが、例えばガソリンの購入の際に環境税が入っていたとすると、毎回給油するたびにレシートに「環境税」の文字が入っていると、長期的に見て人々の消費活動に影響を与えると考えている。負担を出来るだけ低くする方法を採ると効果が薄いのではという意見もあるが、中長期的にじわじわと効いてくる様な形で浸透するのではないかと考える。

また、製品を買い換えするときによりエネルギー消費の少ない物を選ぶようになり、それによって二酸化炭素排出量が削減される。

海外の事例について、欧州の環境税は環境省案に比べると税率が高めに設定されている。欧州の場合は日本と違い、税収を一般財源などにも使われることになっている。日本の場合は環境税の税収を温暖化対策に使うこととしている。

質問票：温暖化対策推進大綱が、目標達成計画に変わることになったが、その中で環境税がどう位置づけられるのか知りたい。

小林氏：目標達成計画は政府全体としての取りまとめになる。閣議決定に乗った形で取り組んでいくが、3月頃にパブリックコメントを出す予定なので詳しいことを今は申しあげられないので、その時にご意見をいただきたい。

菊井：さきほど関西電力の井上様より環境税について反対とのコメントがありましたが、早川様からは何かご意見はありませんか。

早川氏：基本的には賛成している。しかしいくつか知っておく必要があると考えている。一つは環境税によりどのくらい削減出来るのかということ。環境省の計算通りというのは少し難しいのではないか。環境税だけの達成は無理で、排出量取引などの制度との組み合わせが必要。もう一つは地域差による不公平をどうするか。また、燃料税などの今ある税制自体をグリーン化する必要があると考える。環境税を導入するだけで解決するとは考えていない。

菊井：井上様から補足意見があればお願いします。

井上氏：早川氏のご意見の通りであると思う。価格効果や財源効果を言うならば、今の税制を考え、税の使い方を見直すことが必要ではないか。すでに石油石炭税というのがあり、これが環境税と言えなくない。

質問票：原子力発電の稼働率が上下することが炭酸ガスの排出量にも影響することは分かったが、核廃棄物処理など原発そのものの問題についてどのように考えているか。また、自然エネルギーに重点をおくことはできないのか。

井上氏：温暖化問題は 100 年も 200 年も続くものであり、電気事業者としても、原子力発電が決め手だとは考えていない。一時的なつなぎであると考えている。このつなぎを少しでも有効に使うために工夫している。今全ての原子力を廃止したとしても、自然エネルギーでそれを補うことはできない。安全性を大前提とした上で、つなぎとしての原子力を利用している間に、次の革新的なエネルギー技術や効率的な技術を見つける必要がある。究極的には自然エネルギーで全てをまかなうことのできる社会が理想だが、それまでのつなぎとしての原子力エネルギーにご理解いただきたい。

菊 井：小林様の発表に、地球温暖化対策推進大綱予算の内訳が示されていたが、その中で原子力発電対策として 2,000 億円(全体の 5 分の 1)が計上されている。このことについて環境省からコメントをいただけないか。

小林氏：原子力発電は二酸化炭素排出が非常に少ないと言うことで、温暖化対策に資するものと考えている。新幹線の整備についても、自動車を中心とした交通体系から鉄道利用へのモーダルシフト(移動・輸送手段等の切り替え)による二酸化炭素排出が削減できる。温暖化対策に一定の効果があると判断できるものに対して予算を割り振っている。

菊 井：原子力について早川様からご意見をいただけますか。

早川氏：関西では 60%を原子力に頼っているので、即時廃止は現実的ではないと考えている。しかし原子力について考えなければいけないのは、「環境性」「経済性」「原子力無しでエネルギーがまかなえるか」「核廃棄物の問題」そしてあまり言われていないが「テロの危険性」である。CASA では原子力について安全性はあまり深く追求していないが、経済性について検討した。原子力は決して経済的ではない。

日本では原子力発電の善し悪しについてあまり議論されていない。欧米では住民投票で意志決定している。一つ一つ点検しながら冷静に議論をしていく必要がある。我々は即時廃止ではないが順次削減していくことを提案している。

菊 井：電気というのは我々の生活に不可欠になっているが、私たち自身のライフスタイルを変えていく必要があるとの意見もいただいている。

質問票：ライフスタイルを根本的に変えていくためには、ショック療法的な手段も必要ではないか。

久保田氏：ショック療法ができるのであればぜひやってみたい。そういうことはなかなかできないので、普及啓発が必要なのだと思う。ほかには、エネルギーや環境に配慮した生活に転換したときにどれだけ得をするのか、というインセンティブ(誘因・刺激)を作り出していくしかないと考えている。環境の話になるとよくドイツの事例が挙げられるが、ヨーロッパだけが皆の意識が高いというのではなく、環境に配慮すれば得をするという仕組みが結構ある。自然エネルギーについても、それを望む人が得られるように考慮されている。北海道グリーンファンドという NPO があり、市民から出資を集めて大型の風車を建てた。自然エネルギーを望む人には、多少コストがかかっても選ぶことができるという選択肢が用意されており、それを選択した人が得をするようにしていないと、温暖化の危険性や取り組みの必要性だけを説明するだけでは広まらないと感じている。色んな機会にこういう話をしたり議論することが必要。

菊 井：協働の場づくりや参加の枠組みをつくるのが大切というご指摘をいただいた。

井上様よりグリーン電力基金のお話しがあったが、市民と事業者の協働性という観点からコメントをいただきたい。

井上氏：実際にお金を集めるとなるとなかなか難しい。我々は事業者として出前教室を行っている。事業者と市民と一緒に考えてお金を出し、自然エネルギーについて勉強していく必要がある。究極的には子ども達にいかに関心を持ってもらうかということを経営者と市民と一緒に考えていきたい。

菊井：市民意識をどう考えるか、市民と共にどう取り組んでいくかは、都道府県センターにも大きな課題である。同様の問題について環境省のご意見を伺いたい。

小林氏：今回は環境税のお話しをしたが、環境税だけで温暖化対策を進めていくわけではない。様々な政策と合わせて取り組んでいき、その中で普及啓発にも取り組んでいく。例えば一昨日京都府と京都市、国が連携して京都議定書発効式典を行った。また、今回の配付資料「STOP THE 温暖化 2004」のほか、様々な世代に対する啓発資料やDVD教材などを作成して配布している。

他に「CO2削減100万人の環」としてライトダウンキャンペーンを呼びかけたり、「環のくらし応援団」として「モーニング娘。」にミュージカルをしてもらうなどしてきた。様々な取り組みをセットで進めていきたい。

菊井：最後にパネリストの方に、それぞれ決意表明も含めてコメントをいただきたい。

久保田氏：「温暖化防止のために」とか、「省エネ型の社会を作る」とか、「自然エネルギーを増やしていく」といったことは、一人ではできないことだが、少なくとも自分たちがそれを望んでいると声を上げていくことはできると思う。様々な場面で意見を言い、それを支持してくれる人を少しずつでも増やしていくことは決して無駄にはならない。1人の人からでも始めることは出来る。その支持者が2人になり、3人になってどんどん増えていって何%かになったときに、社会の中で大きな発言力となることができる。温暖化センターや推進員の方は全国に共通する制度のもとで活動しているので、そういった中で互いに協力していきたい。

井上氏：温暖化問題は一人ひとりが加害者であり被害者である。産業界、メーカーは、一定の経済活動の中ではあるが、必死の思いで省エネ機器の開発を行い普及するために取り組んでいる。選択するのは皆さんである。見る目を養ってもらい、ごまかされずに正しい選択をしていただきたい。

小林氏：温暖化対策は待ったなしの状況にある。自覚を持ってもらうのは難しいが、経済への影響と合わせると環境対策についてイメージしやすい。環境省としては環境と経済が両立する社会を作ることを目指している。そのためには国民全体が正しい知識を持って対策に取り組む必要があると思う。最も重要なのは環境教育であり、それを支えているのは草の根の活動。小池環境大臣がよく言っているように、国民の皆さまは環境省の応援団だと考えているので、これからも皆さまにご協力をお願いしたい。

早川氏：1997年11月1日にCOP3が始まったときに、この様な目標数値になるとは誰も想像していなかった。市民の関心の高さや行動が京都議定書を生み出したと考えている。かつて日本では公害がひどかった時に地方自治体を変えて国の政策を変えたという経験がある。市民が関心を持って動けば変わるし、そこにしか解決の鍵はない。ここ20年の間に温暖化を防げるかどうかのチャンスは失われてしまう。その間に私たちが行動し、社会経済システムを変えていかなければならない。私

もこれからも頑張りたいと思う。

篠山地域連絡会の活動発表

パネルディスカッションの後、篠山地域温暖化防止活動推進員連絡会により活動発表と、篠山地域で作成した温暖化防止啓発用の紙芝居を上演した。



[グループワーク]

グループワーク基礎知識の修得

- ・「研修会参加の手引き」によりグループワークについての基礎知識、心構え等を講義

グループ分け

- 今回のパネルディスカッションで得た情報や、参加者各自が普段の活動などに関心を持っている内容などを参加者一人ひとりが1枚の用紙(A5サイズ)に記述
- 全員が上記の用紙を見せ合い、自分の書いたものに似た内容を記述した参加者同士で集まり、7~8名のグループを作る
- メンバーの中から、リーダー、書記、タイムキーパーを選出
- メンバー全員の合意形成により、グループワークのテーマを確定
- テーマに沿って、グループワークを実施

グループワーク途中経過発表

- 各グループ10分でグループワークの途中経過を発表
- 発表に対して、アドバイザーおよび参加者から質疑応答を行う

グループワークまとめと発表

- 上記の意見等を元に、グループワークを継続進行し、内容を整理する。
- 各グループ3分でグループワークの結果を発表





グループ発表内容

No.	グループワークテーマ	グループ名	内容
	子供の環境学習	ユニトピア黒豆会議 (メンバー10名)	<ul style="list-style-type: none"> ・国の環境教育施策の問題点 ・学校での環境教育プログラムの提案(紙芝居など) ・学校と連携するためのノウハウ ・行政と推進員の連携の必要性
	家庭の身近な省エネ	省エネ (メンバー8名)	<ul style="list-style-type: none"> ・省エネに関する課題抽出(直接的、間接的、中期的、長期的) ・解決策の検討(思いやり、家族のつながりが必要) ・具体的な省エネ行動の検討
	『エネルギー』 ～太陽と北風に向か って～	ささやま風っこふうち やんズ (メンバー8名)	<ul style="list-style-type: none"> ・エネルギー問題に対する推進員の関わりについて検討 ・子どもとの関わりについて検討 ・実体験の情報交換 ・問題点の整理 ・自然エネルギー普及の提言
	活動の魅力作り	新しい風 (メンバー8名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいの整理 ・実現可能、具体的かつ新しいプログラムの企画(自然体験中心) ・平成17年度に丹波地域で実施する ・場所、内容、主催、募集方法を検討 ・実現のためにはセンター、推進員の協力が必要
	原子力発電はCO2削減の 切り札か	わくわく発電チーム (メンバー6名)	<ul style="list-style-type: none"> ・電力使用について現状の確認(ムダが多い。ライフスタイルの転換) ・電力使用についてと問題点(原子力に依存することへの問題) ・対策の検討と提案(地域間の連携、こどもへの教育の重要性)
	効果的な啓発方法	九輪会(クリーン会) (メンバー9名)	<ul style="list-style-type: none"> ・プログラムの検討(エコチェックに重点をおく) ・学校等への働きかけの方法を検討 ・実施時期の検討 ・連携、バックアップ体制の検討
	自然との共生	グリーン (メンバー8名)	<ul style="list-style-type: none"> ・メンバーの自然に対する思いを共有 ・各自の取り組み情報を共有 ・自然を守るために必要な要素、不要な要素の整理



[ふりかえり・わかちあい]

研修にて学んだことをふりかえり、学びや気づきを深めることを目的として実施した。

「ふりかえりシート」に記述し、グループ内で発表

グループ内で発表した内容をまとめて、他のグループに対して発表



ふりかえり内容 (主なもの)

今回の研修で初めて知ったこと(または学んだこと)

- ・ 今回が初めての参加でグループワークを知りました。
- ・ 篠山の推進員さんたちの活躍のほどを知って感心した。我が地域でも活動の参考にしたいと思った。
- ・ 他のグループの発表から、温暖化防止推進のあり方が学べたと思っています。私たちのグループでは具体的プランが(自主的に)生まれたことがよかったと思う。
- ・ 昨年2月以降2回目の研修だった。だいぶ研修の雰囲気にも慣れて少し判るようになった。参加者全員の活発な討議に驚きと共に圧倒されることもあった。
- ・ 京都議定書発効というベストタイミングで、パネルディスカッションを通じいろいろな知識を修得出来た。
- ・ 目的が同じであるのに意見が違う。
- ・ 十人十色の意見がある。コミュニケーションの取り方しだいで効果は図り知れません。
- ・ 色々な方々より、たくさんの研修面で、兵庫県『地球温暖化防止活動』についてのはずみ、とっかかりができた様に思います。

今回の研修で気づいたこと

- ・ 自然エネルギー、エコライフ、原子力について推進員の中でも意見の相違があること
- ・ 言うことは100%言えた。ルールを守ることが大切。
- ・ 回りの人の知識、教養の高さ広さ。人脈の多さ
- ・ 京都議定書の発効に伴い市民の関心が非常に高くなりつつあるなーと思った。
- ・ 同じ「自然(グリーン)」という言葉でも意味合いが異なることで、同じ立場で検討することが出来にくいこと。
- ・ 政府の本腰がやっと感じられる様に思いました。
- ・ 日常活動のあり方で、自信不足があったが、他の皆も同じように悩み苦しんでおられることがよく分った。経験を2年目に活かします。
- ・ 経験を積むことの大切さ。継続は力なりとはよく言ったものです。実感しました。

- ・ 推進員活動に壁を感じている人が結構大勢いる。
 - ・ 自分の意見を十分に発言出来る人が多い。
- 今回の研修で残念だったこと
- ・ 発表時間が少なく、チームとして盛り上がった時点で発表出来なかった事は残念。
 - ・ グループワークでは、メンバーが9名と多かったため、自分の役割を十分発揮できなかった。
 - ・ 時間的な制限かつ十分な討議ができないので、お互い言いつばなしの感がある。
 - ・ 推進員が関係先に環境教育をお願いに行っているのが現状。この体系はおかしい。
 - ・ 『兵庫県地球温暖化防止活動』について関心のある高校生、大学生たちの参入を求めたい。
 - ・ ありません。充実した二日間でした。
- これから取り組んでみようと思ったこと
- ・ 環境家計簿の普及
 - ・ 身近な問題から出来る事から始めたいと思う。
 - ・ 学校や自治会等へもっと積極的にかかわり、子供達を含めた活動をやりたい。
 - ・ これから我が地域でも、推進員同士で協力し合って成果をあげたい。
 - ・ 出来るだけ、伝えるチャンスをふやす。実行に移すこと。
 - ・ 勇気を出して実行、行動に移すこと。
 - ・ 少人数でもまず定期的に集まる。
 - ・ 温暖化防止のために原子力発電をどうとらえるかの場を作りたい。

アンケート集計結果（主な回答）

パネルディスカッション全体についての感想

- ・ 話の流れが良かった。
- ・ 質疑応答の時間がもう少しあると良かった。
- ・ 京都議定書発行後のよいタイミングであったと思います。

グループワークについての意見、感想

- ・ 自分の主義主張は大切であるが人の話にも耳を傾けることが大切であることを痛感した。
- ・ 十人いれば十の意見があることが学習できました。
- ・ 自主的にテーマを決めるのが良かった

今後の活動についてどうあるべきか、またどうしていくか

- ・ 学校での活動に関して学校への橋渡しの部分は行政の方で担っていただきたい。私たち推進員はプログラム作成やメニュー提案に力をいれて、スキルアップに努めたい。
- ・ 得た知識、刺激を受けたことを今後の活動に活かしていきたい。
- ・ 実践の展開とネットワークの拡大

4. 総括

今年度の地球温暖化防止活動推進員等研修会の実施にあたっては、昨年度(平成15年度)に開催した同研修会における反省点ならびに参加者アンケートの集計結果を基に、推進員に必要と思われる研修内容について検討を行った。

また、兵庫県の地球温暖化防止活動推進員および協力員は総数439名となっており、地球温暖化防止についての意識はいずれも高いものの、知識や活動状況については非常に大きな幅があると思われるため、今年度の方針として、できるだけ幅広くの人が理解できるよう、最新かつ基本的な情報を講義に盛り込むこととした。

また、高い知識や豊富な情報、活動実績を持つ推進員が、それ以外の推進員に情報をつたえるきっかけとなるよう、宿泊型研修においてはグループ討議の時間を多く設定した。

特に今年度は、以下の10項目についてのスキルアップを図るべく、全5回の研修会にそれぞれの項目が盛り込まれるよう企画した。

スキルアップの項目	分野	実施回
最新の知識、正しい知識の習得	知	第1回、第2回、第5回
教材を活用した指導方法	体	第2回
体験学習	体	第2回、第3回、第4回、第5回
グループ討議	体・技	第2回、第5回
身近な問題(地域の事など)を知る	知	第2回、第5回
情報発信の仕方	技	第4回
コミュニケーション技術の習得	技	第3回、第4回
会議・議論の進め方	技	第4回
パネルディスカッション	知・体	第5回
先進取り組み事例の発表	知	第1回、第2回、第5回

[分野の説明] 「知」...知識の修得；「体」...体験学習；「技」...技術の習得

また、可能な限り多くの推進員・協力員が参加できるよう、開催地域の特性、開催時期等を考慮した。

開催回	開催場所
第1回(日帰り)	神戸地域
第2回(1泊2日)	神戸地域
第3回(日帰り)	阪神北地域
第4回(日帰り)	中播磨地域
第5回(1泊2日)	丹波地域



体験学習を重視した第2回、第3回、第4回、第5回については、ふりかえりの時間を設け、各自が体験を通じて学んだ内容についてふりかえり、他の参加者と共有することに重点をおいた。

その結果、他者との意見の違いを知ると共に、新たな発見を得ることができるなど、体験学習による相乗効果があらわれている。

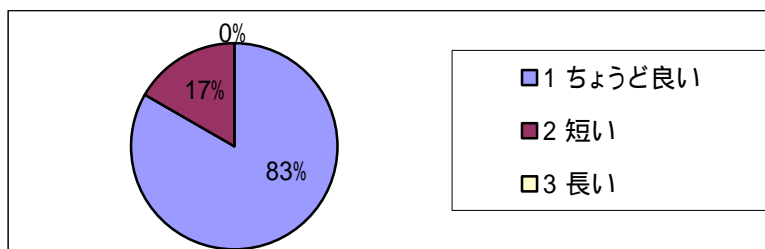
また、第2回、第5回の宿泊型研修については、アンケート記入の時間を十分にとり、参加者からきめ細かな感想、意見、要望等を聴取した。その結果、今年度開催した研修についてはいずれも高い満足度を得られたと判断できる。

第2回研修会 アンケート結果 (参加者52名中46名回答：回収率88.5%)

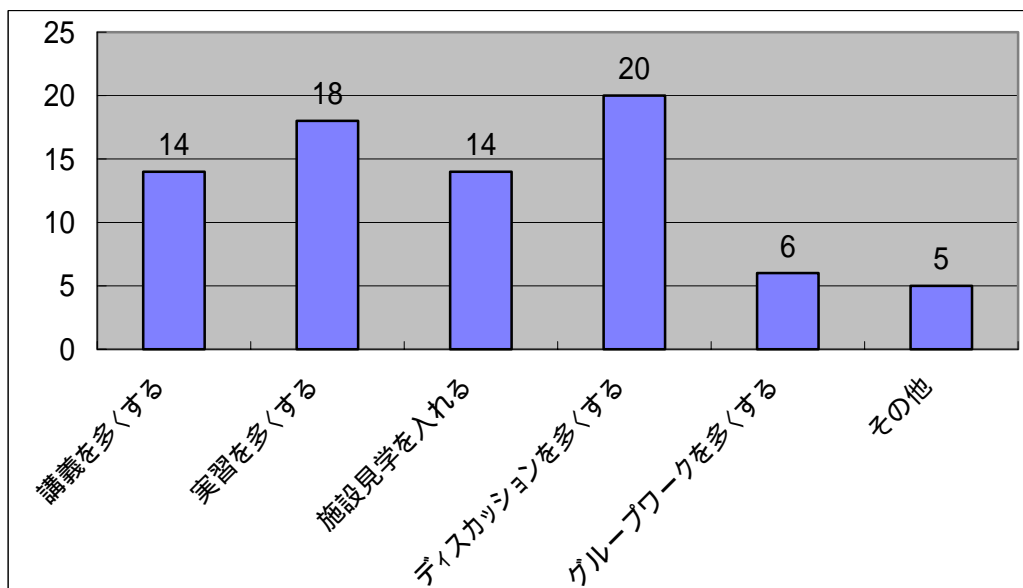
回答者内訳

年齢	男	女	計
30歳代以下	1	0	1
40歳代	0	1	1
50歳代	3	6	9
60歳代	21	2	23
70歳代以上	10	2	12
計	35	11	46

2日間という日程について

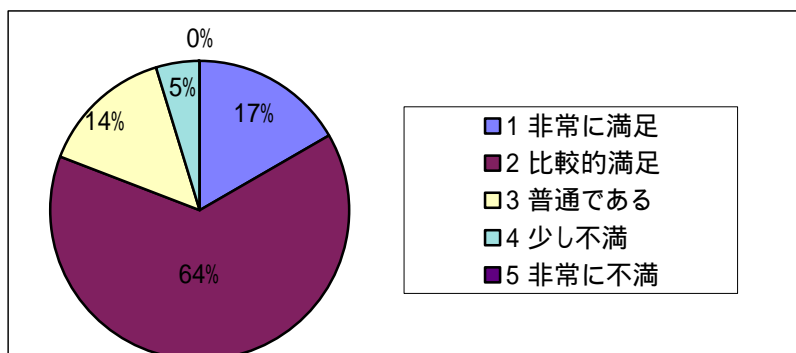


研修の形について



その他(5名)のうち、4名は「今のままで良い」

研修の満足度

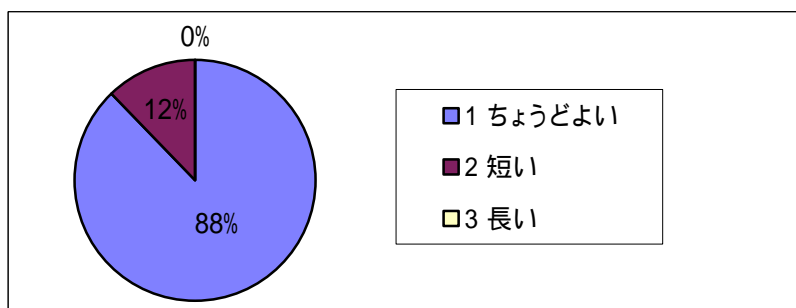


第5回研修会 アンケート結果 (参加者 59 名中 53 名回答 : 回収率 89.8%)

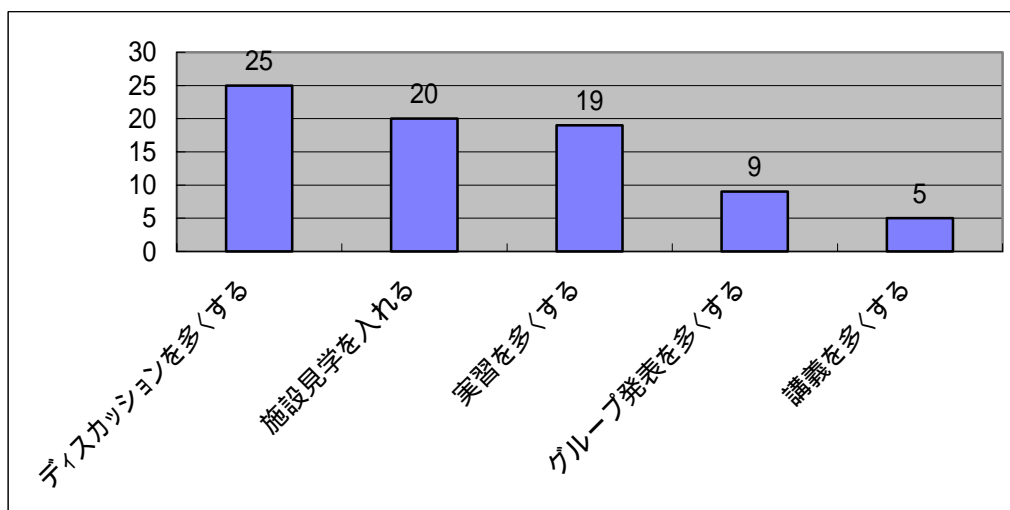
回答者内訳

年齢	男	女	計
30 歳代以下	1	0	1
40 歳代	0	3	3
50 歳代	7	6	13
60 歳代	22	3	25
70 歳代以上	10	1	11
計	40	13	53

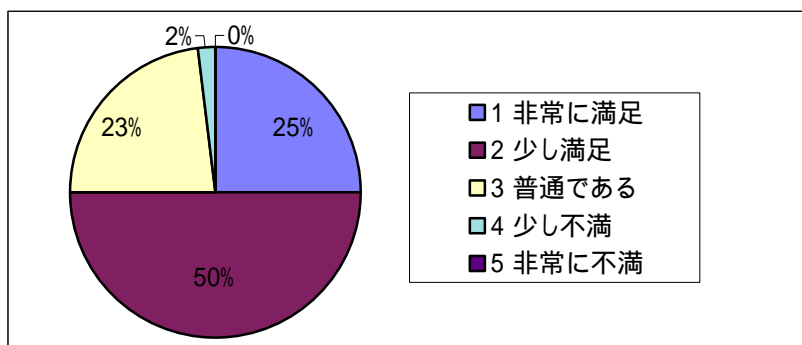
2 日間という日程について



研修の形について



研修の満足度



今回の研修を通じて、新たに知識を得た参加者、他の推進員から活動のきっかけとなる情報を入手した参加者、地域で連携することの必要性を感じた参加者などが多数見られ、今年度の研修の目標を達成できたものと思われる。

問題点として、439名の推進員・協力員全てにきめ細かな研修の機会を準備することが非常に困難であることが挙げられる。

各回の参加者数を以下に示す。

研修実施回	男性	女性	計
第1回	189	103	292
第2回	38	14	52
第3回	15	5	20
第4回	9	7	16
第5回(シンポのみ)	12	7	19
第5回	43	16	59
計	306	152	458

研修参加者延べ人数

参加回数	男性	女性	計
4回	6	1	7
3回	26	9	35
2回	41	18	59
1回	122	85	207
0回	50	81	131
計	245	194	439

推進員・協力員総数

今回、延べ458名の推進員・協力員が研修会に参加し、推進員・協力員1人あたり研修会に1.04回参加しているが、複数回参加している推進員がいるためであり、1度も研修会に参加していない推進員・協力員が131名にのぼる。研修会に参加できない理由として、仕事、家庭の都合等が考えられるが、できる限り多くの推進員・協力員が参加できるよう、

配慮する必要がある。

今後の課題として、今年度実施したような基礎的な知識、技術の習得を目的とした研修のほかに、既に豊富な知識と経験を持つ推進員・協力員に対して、より専門的なテーマに特化した研修会の企画や、教育現場等での実践活動などモデル的な事業を研修の機会として位置づけることが必要と思われる。